

所 陵

No. 58

[SENRYO/KANSAI UNIVERSITY MUSEUM REPORT]



瓢箪 Gourd (羽間コレクション)

● 目 次 ●

世界遺産登録の光と影	米田 文孝 2
天竜川流域の天王祭	黒田 一充 4
昆虫と考古学	宮武 頼夫 6
鹿角市先人顕彰館—内藤湖南の里を訪ねて—	石立弥生子 9
台北縣立十三行博物館	山口 卓也 10
長島侯と文人たち—『独樂園賀詞帖』をめぐって—	中尾 和昇 12
ジャマヒリーヤ博物館—リビアの首都トリポリを訪れて—	青木 真兵 14
博物館だより	16

関西大学博物館

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

Tel. 06-6368-1171 (直通) Fax. 06-6388-9928

<http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/index.html>

世界遺産登録の光と影

米 田 文 孝

現在、世界遺産リストには878件（2008年7月現在）の登録があり、インド共和国内では27件（文化遺産22件、自然遺産5件）の世界遺産が登録されている。さらに、ここで話題にする石窟寺院では、1983年に登録されたアジャンター石窟とエローラー石窟、1987年に登録されたエレファンタ石窟の3件がある。

1880年代、世界遺産に登録された文化遺産や自然遺産には外国人観光客の訪問が増加したが、1990年代にインド政府の経済政策が転換された結果、急激な経済発展と新興富裕層の増加を生じ、国内観光客も急増した。この状況に歩調を合わせて、登録遺跡では保存修復対策と観光施設化対策、特に後者が積極的に進められるようになった。

例えば、アジャンター石窟では都市・遺跡間の道路整備や壁画の保存修復事業とともに、自家用車の急増に対応したP&R（パーク・アンド・ライド）の導入による環境対策や、急崖面における遊歩道の整備や給水施設、電力供給などを通じた訪問者に対する利便性や安全対策などの事業が着実に進められた。

これらの事業の推進には、わが国もODA（政府開発援助）などを通じて支援しているように、国際的な財政協力が寄与する部分もあるが、さらに潤沢な入場料収入が後押ししているであろうことは想像に難くない。

入場料は遺跡により異なるが、例えば常に国内外の訪問者で混雑しているアーグラのタージ・マハル廟の入場料をみると、外国人の場合は750Rs（インド・ルピー）と高額である。周辺国であるSAARC（南アジア地域協力連合）や、BIMSTEC（ベンガル湾技術経済協力機構）加盟国からの訪問者に対する配慮はあるが、為替レートで比較した場合、約1,500円（2009年3月現在）、さらに購買力平価で比較した場合に、その差は拡大するであろう。

一方、世界遺産に登録されていない大部分の石窟に目を転じると、その保存修復対策は遅遅

として進んでいないように見受けられ、近年その荒廃や破壊が加速している。従来からの岩質に起因するファサード（石窟前面外観）の崩落はもとより、石窟内に生息する多数のコウモリによる生物的な汚損や宗教的な破壊・改築など、自然・人為的な損壊は徐々に進行していることは否めない。

さらに、インドにおける大部分の石窟が分布している西インド地域では、近年モータリゼーションの発達と高速道路網の整備とが相俟って、従来はアクセスが困難な地理的環境にあった石窟寺院にも人びとが容易に訪問することができるようになり、その結果としてゴミの投棄や落書きなどの環境汚染や人的な損壊が急増している現状にある。

特に憂慮されるのが、各石窟に共通する落書きの増加である。監視人がいる世界遺産に登録された石窟や、聖地として宗教者が常駐している一部の石窟を除き、その惨状は目を覆うばかりである。実際、定着性の高い塗料で大きく書いた落書きや、鋭利な刃物で直接彫り込んだ落書きなどは、壁面や浮彫などを損傷せずに除去することは困難であろう。

観光地における落書きと一括したが、インドや仏教との関連で見た場合、例えばアンコール・ワットの落書き（日本語墨書）にみられる



マディア・プラデーシュ州ジュンナル石窟
ブド・レーナー群（第45～47窟）の落書き

ように、後世にその記述内容が歴史的に重要になる事例もある。アンコール・ワットには14例の日本語墨書がのこるが、その十字型回廊に森本右近太夫が認めた墨書（寛永9年＝1632）は、当時の日本人がカンボジアを祇園精舎の国として認識・憧憬し、商業活動とともに仏教を介在とした交流があったことを推測させる歴史的史料である。ただし、このような事例は希有であることは言を俟たないであろう。

さらに、石窟寺院に遺存する石彫像をはじめとした重要な遺物に対する人為的な損傷行為も散見されるようになった。例えば、エローラー石窟から約50kmのピタルコーラー石窟は、その第3窟（チャイティア窟＝祠堂）の天井部に紀元前の開鑿時の蓮華紋が遺存する石窟として重要であるが、その第4窟（ビハーラ窟＝僧院）の前面に設けられた階段室の入口部左右に彫り出された一対の守門神浮彫のうち、近年その一体（左側）の頭部が壊され失われた。これは地域に住む子供の行為であるというが、かつては昼間のみであるが配置されていた監視人が削減された以降に起こった事件である。

文化遺産に対する落書きの問題は、ひとりインド共和国のみの問題ではない。わが国でも国内外の世界遺産登録遺跡や歴史的建造物などに対する落書き行為がマスコミで大きく報じられたことは記憶に新しい。

インド政府当局も事態を憂慮して、昨年から世界遺産である「デリーのクトゥブ・ミナールその建造物群」を舞台にした落書き防止（文化遺産保護）キャンペーンを繰り返し放映している。広大な国土に膨大な遺跡が分布する環境下では早急な改善は困難であろうが、監視人の配置をはじめとした保護対策が推進されることが希求される。

【主要引用・参考文献】

石澤良昭, 2004, 「1632年にアンコール・ワットを訪れた森本右近太夫一房の消息」『三笠宮殿下米壽記念論集』, 刀水書店。

神谷武夫, 1996, 『インド建築案内』, TOTO出版。

平岡三保子, 2000, 「西インドの石窟寺院—仏教石窟寺院の発生と展開—」『図版解説』『世界美術大全集東洋編第13巻インド(1)』, 小学館。

Dehejia, V., 1972, "Early Buddhist Rock Temples", Thames & Hudson, London.

Dhavalikar, M.K., 1984, "Late Hinayana Caves of Western India", Deccan College, Poona.

Fergusson, J. & Burgess, J., 1880, "The Cave Temples of India", 1988, reprint, Munshiram Monoharlal Publishers Pvt. Ltd., New Delhi.



マディヤ・プラデーシュ州ピタルコーラー石窟
(上左) 第4窟守門神浮彫 頭部(破壊前)
(上右) 第4窟守門神浮彫 頭部(損壊後)
(下) 第4窟基段全景



インド政府による文化遺産保護キャンペーン (1)



インド政府による文化遺産保護キャンペーン (2)
(Incredible India, Ministry of Tourism, Initiative of Government of India, Do Not Spoil Indian Heritage, Every Monument is Our Treasure)

天竜川流域の天王祭

黒田 一 充

夏祭りは、疫病や飢饉などの原因となる疫神を集落内から取り除こうとするものであり、そこに麦の収穫祭、水神の祭り、都市の祭礼など様々な要素が加わっている。京都市の八坂神社（祇園社）や愛知県津島市の津島神社（津島天王社）は全国各地に勧請され、夏祭りが祇園祭や天王祭の名称で行われるところが多い。その中で、静岡県西部の天竜川水系には、特に古い夏祭りの形態が残っており、紹介したい。

天竜川中流域の浜松市天竜区佐久間町には、支流の水窪川が流れている。同町相月の島地区にある八坂神社では、6月に水窪川の祇園淵と呼ばれる川原で祇園祭が行われる。

この川原には、青垣山を作る。竹を両端に二本ずつ立て、割竹を横に渡して茅を挟み、壁のように並べたものである。茅の前には、黒（紫）・青・赤・黄・白の五色の御幣を立て、平たい石の上に榊葉を12枚置き、その上に蒸した麦と炒った麦を半分ずつ供える

ここには、禰宜屋とよばれる代々神社を守る家があり、その家を中心に祭りが行われている。祝詞が読み上げられ、参加者が榊を捧げた後、祭りの最後に白紙に包んだ麦を禰宜屋が「祇園ポーズ」と唱えて川へ放り投げる（写真

1）。淵に住む祇園坊主が悪さをするのを鎮めるものだという。茅を並べた青垣山は、神籬と呼ぶ古い祭祀形態を伝えている。

天竜川の河口部に近い浜松市南区下飯田町では、8月上旬に代表が津島神社に参拝し、神札を受けて帰って祭りをを行う。ここでは、長老たちが氏神社の六所神社に集まり、青竹と杉葉を材料にして神輿を作る。横幅と奥行が50センチメートルで、高さが60センチメートルの大きさで、屋根の棟の両端は角のように反り上がっている。神輿ができあがると祭りをを行い、そのまま翌年まで社殿の中に祀っておく（写真2）。

その代わり、翌日には前年から祀ってあった古い神輿を子供たちが「ヨイトー、モイトー」という掛け声を叫びながら担いで廻り、集落東側の安間川（旧天竜川）に運ぶ。昔はそのまま川に流したが、今は火を付けて燃やしている。南隣の金折町や天竜川東岸の磐田市池田町でも、現在は燃やしているが、舟に神札を祀って川に流す行事が残っている。

同じ津島信仰の祭りとして、7月上旬に静岡県東部の三島市中郷地区では、津島神社の神札を祀る木の祠を担ぎ棒に縄で縛り付け、神輿として氏子地区を担いで廻る行事がある。かつては、川にも放り込んだようだが、祭りの後には、氏神社の鳥居の横にお涼み台と称する台を設け、その上に祠を置いて7日間祀っている。こちらは、毎年使える木の祠になっているが、下飯田町の神輿と共通する祭りの形態を伝えている。

下飯田町の杉葉の神輿は、屋根の棟の両端が反り上がっているのが特徴だが、東に約10キロメートル離れた磐田市東脇・十二所神社とそのすぐ南西にある同市新出・春日神社の境内には、同じような屋根の棟の両端



写真1 浜松市天竜区佐久間町・島の祇園祭 祇園坊主へ麦を放り投げる

を反り上がらせた津島神社の祠が祀られている(写真3)。

高さは2メートルほどの、青竹を柱にして杉葉で覆った高床・平入の祠で、内部は割竹の棚床の上に御幣が祀られている。東脇の方が少し背が高い以外は、ほとんど同じ形である。毎年7月第2日曜日ごろに、枯れた前年の祠を撤去して新しく作り、そのまま翌年まで置かれる。この東脇や新出の祠と下飯田町の杉葉の神輿は、非常によく似ている。

磐田市の東隣の袋井市西^{どうり}同笠の寄木神社の境内には、もっと大きな津島神社の祠が祀られている。海浜から運んだ砂を盛り、4本の青竹を柱にして杉葉で周りを覆っているが、形態は切妻屋根の妻入の構造になっている。もうひとつ大きな違いは、内部は棚ではなく、津島神社の神札を納めた小さな祠を一本柱で立て、その上から仮屋で覆っている(写真4)。正面の壁には長方形の穴が空けられ、中の神札が拝めるようになっている。

この祠も7月上旬につくられてそのまま一年間祀られているが、『浅羽町史』には、杉葉で覆うのは種籾を虫やネズミの害から守るため、昔は祠に種籾を入れていたとの伝承があると記している。地元の年配の方からは、幼いころに内部に稲穂を挿していたような記憶があると話をうかがった。

このような杉葉の祠は、他所にも数多くつくられていたようだが、現在はほとんどなくなって常設の祠に変わっている。疫神を取り除くため、夏の間だけ祀られていた祠が、一年を通じて祀られるようになっていった様子がうかがえる。さらに、現在各地の神社の境内に祀られている末社の祠の中に、このような仮設の祠から常設の祠へと変わっていったものがあつた可能性をも、うかがい知ることができる貴重な資料である。



写真2 浜松市南区下飯田町・六所神社 杉葉の神輿
(左奥は前年の神輿)



写真3 磐田市東脇・十二所神社 津島神社のお仮屋



写真4 袋井市西同笠・寄木神社 津島神社のお仮屋

昆虫と考古学

宮 武 頼 夫

1. はじめに

ちょうど30年前から、当時勤務していた大阪市立自然史博物館の上司の日浦 勇氏と一緒に長野県の野尻湖発掘に参加するようになって、昆虫化石の研究を始めた。その後、縄文時代や弥生時代などの考古遺跡から出る昆虫（「昆虫遺体」とよぶ）の研究にも手を広げ、それらの昆虫から古環境の復元をしたり、当時の人たちの生活の様子を復元したりといった研究を行っている。

昆虫はエビやカニと同じ節足動物の仲間なので、体はいくつものパーツからなる外骨格でできており、よろいを着ているような感じである。死ぬとばらばらのパーツに分かれてしまうので、遺跡から出土する昆虫遺体は、ハネ1枚とか、頭とか、胸板、足のもも節など、体のごく一部で、それからどういった昆虫のどの部分かを判定しなくてはならない。昆虫の種名が分かってはじめて、その昆虫の住む環境や食物などから、古環境の復元が可能になるのである。

かなり古い研究成果であるが、トピックスのいくつかを紹介する。

2. 北白川追分町遺跡（京都市／縄文時代晩期）

京都大学の北部構内にある遺跡の発掘（1978年と1984年）で、266点の昆虫遺体が出土した。タマムシやアオカナブンなど、美しい光沢のある甲虫の類が多く発見されたが、最も顕著な昆虫は、山の牧場で主に牛の糞を食べるダイコクコガネの頭部であった。この種は、昨今近畿地方でも絶滅に瀕している希少種で、小型の哺乳類の糞にはあまり発生しない。当時はまだ牛は飼われていなかった時代なので、牛に準ずる大型の哺乳類が生息していたと推定される。

ここでは平地の林に生息する昆虫も出ているが、ツノアオカメムシやアオカナブンなど、山地性でブナ林などに棲む種類も多く出ているので、当時の気候は幾分今よりは涼しかったと考えられる。

3. 長原遺跡（大阪市／弥生時代中期～後期）

1975年の発掘中に、現場で調査に加わり、20点ほどの昆虫遺体を発見することができた。コクワガタやタマムシ、コガネムシ類以外に、割に大形のゲンゴロウ類の上翅（前ばね）が見つかった。深い溝が縦に走る見たこともない種類だったので、よく調べて見ると、大阪では1943年の記録（枚方市）を最後に絶滅してしまったシャープゲンゴロウモドキの右上翅であることが分かった。このゲンゴロウは、水田のまわりの緩い流れの水路などに生息しており、水草などを食べて生活している。戦後の農薬汚染で滅びてしまったと思われる、近畿地方でも現在わずか数カ所でのみ残っている。ゲンゴロウモドキ類は、東北日本や北海道で繁栄していることから、減少には最近の地球温暖化の影響も受けているのかもしれない。

4. 池上曾根遺跡（和泉市・泉大津市／弥生時代～古墳時代）

この環濠集落の発掘では、いくつかの溝が検出されたが、その内の二つの溝でサンプリングを行って、多くの昆虫遺体を得られた。一つは弥生時代中～後期の人工の溝と思われるところで、エンマコガネ類やマグソコガネ類など糞に集まる甲虫が多く、ドウガネエンマムシなど腐肉などに来る昆虫も多く出ているところから、このようなものが多量に捨てられる、ゴミ捨て場のようなところだったと推定される。この溝

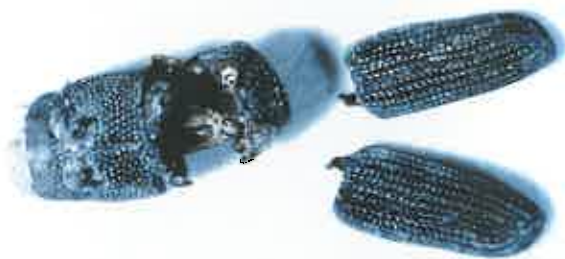


写真1 コクゾウムシの遺体（池上・曾根遺跡）

からはわずか1点であるが、コメの害虫であるコクゾウムシが出ている（写真1）。当時は既に稲作が盛んに行われていたところであるが、貯蔵してあったコメについていたか、非常に体が硬い虫なので、米とともに炊かれて、人体を通過し、排泄されて出た可能性もある。

もう一つの溝は、古墳時代の前～中期の自然流路だったと思われるところで、湧き水などの環境に棲むオオイチモンジシマゲンゴロウ（大阪では既に絶滅している）が見つかったところから、きれいな水があったところだと推定される。また、ヒメコガネ、コガネムシ、ドウガネブイブイなどのコガネムシ類やモリチャバネゴキブリなどが発見されていることで、周辺には二次林が広がっていたと思われる。ヨモギハムシやセアカヒラタゴミムシなどの出土から、周辺には草地もあったと考えられる。

5. 亀井遺跡（八尾市／弥生時代中期～後期）

1978年～1980年にかけて行われた発掘調査で、388点もの昆虫が発見された。多量のもみ殻や、イネを刈り取る石包丁などが多く出土しているので、この有名な環濠集落のまわりでは、イネの栽培が盛んに行われたと考えられている。



写真2 イネノクロカメムシの腹板（亀井遺跡）

昆虫でも、イネの大害虫であるイネノクロカメムシの胸部や腹部（写真2）が発見され、それを証明している。この害虫は、戦後農薬が使われるようになる前までは、イネに大害を与えており、昔は収穫が皆無になるほどであったという。しかし、戦後に農薬が多用されるようになって、害虫ではなくなった。現在でもマコモなどについて発生しているのを見ることができる。この虫は、昔から日本にいたものが、大々

的にイネが栽培されるようになって移ったという説と、イネの導入とともに日本に入ってきた害虫だという説と二通りある。

この遺跡では、コガネムシ類、コアオハナムグリ、アカガネサルハムシ、ツマキアオジョウカイモドキなどの昆虫が出土しているところから、周辺は人為度の高い二次林が取り巻いていたと考えられている。

6. 藤原京跡の「便所遺構」（奈良県／飛鳥時代）

1992年の藤原京跡の発掘で、細長い穴（長さ1.6m、幅0.5m、深さ0.4m）が見つかった。この穴には当時トイレトペーパーのように使用されたといわれる籾木（ちゅうぎ）が多数埋もれており、底の土にはおびただしい量の寄生虫卵が含まれていたことから、便所だったと推定された。出土した昆虫遺体にも、糞便や便所に来る昆虫類が多く見つかった。糞便を食するコガネムシ類（糞虫と言われる）では、マルエンマコガネ（写真3）・フチケマグソコガネ・ウスイロマグソコガネの3種が検出された。後の2種はシカの糞などにもつくので、現在奈良公園などでも、普通に見ることができる。ところが、マルエンマコガネは1960年代くらいを境に、身近で見ることが出来なくなってしまった。好きな糞は人糞やウシ・ウマなどの糞だったらしい。その頃から農業は機械化されて、牛や馬を飼わなくなった。トイレはくみ取り式から水洗に変わり、糞尿を肥料として使わなくなった。このような農業形態の変化や、トイレ事情の変化で、この虫が棲みにくくなったのでいなくなったと考えられている。

この便所遺構の総合的な研究方式により、その後全国の各地の便所遺構が検討されるようになり、「トイレ考古学」がめざましく発展した。



写真3 マルエンマコガネの前胸背（藤原京跡の「便所遺構」）

7. 平城京跡（奈良市／奈良時代前半～中頃）

1988～1989年にかけての平城京の長屋王邸・藤原麻呂邸の調査に関連して、二条大路の南北に掘られた壕状の遺構（溝）から、34点の昆虫遺体が発見された。ここでは、大量の木製品、木簡、土器、植物遺体が出土しており、動物の死体を食べるツシマヒラタシデムシ（草原性）や多数のハエの囲蛹が見つかったところから、ゴミ捨て場的な環境であったと推定されている。河原の草地に多いアオゴミムシやナナホシテントウなども出ているので、付近は草原であったことが裏付けられる。平城京跡では、現在でもツシマヒラタシデムシが生息しており、時々ミミズの死体などを食しているのが見られるので、ここでは継続して草原的な環境が維持されてきたことが分かる。

また、スジコガネ、ヒメコガネ、ツヤコガネ、コアオハナムグ、タマムシなどの甲虫の出土は、スギなども混じる二次林が近くにあったことも示している。糞虫のオオセンチコガネが見つかったので、林の内外にシカなどの中～大型の哺乳類がいたことを物語っている。

出土した昆虫の中で、クッキーのような炭化物から、コクゾウムシの成虫が少なくとも2匹以上、蛹が1体見つまっている。粉についたままこねられて焼かれたか、焼いた物についたかはよく分からないが、おそらく焼く前に入っていたものであろう。遺跡から出土する昆虫の中には、作物の害虫なども時々見つかり、それが作物栽培の歴史を物語る場合もあるが、このように食生活に直接結びつく例は少ない。

ちょっと変わったものとしては、ガの繭の一部（多分ヤマユガ類）が発見されている。ヤマユガ類の繭（ヤマユガヤクスサン）は、カイコの絹糸と同様、古来衣類に利用されてきた。この1件でそこまで結びつけるのは暴論であるが、遺跡から出る昆虫は色々な夢をかきたててくれる。

8. 水走遺跡（東大阪市／室町時代）

ここは色々な状況からハス田だったと言われているところで、チョウトンボやコオイムシ、ゲンゴロウ類・ガムシ類・ネクイハムシ類など、水生昆虫の仲間が多く出土している。その中で

も目をひいたのは、黄褐色の小さな上翅で、翅端に顕著なトゲがあり、点刻の列が黒いすじ模様になっているものであった。このような奇妙な上翅は、疑いもなくキイロネクイハムシ（写真4）のものである。



写真4 キイロネクイハムシの左上翅（水走遺跡）

このネクイハムシは、平地の池や沼に生息する水生甲虫で、1962年の福岡市での記録を最後に、姿を消してしまった。山の池に棲む昆虫であれば生き残れたのであろうが、平地では最も人為による影響を受けやすかったのであろう。高度経済成長政策による開発や環境の汚染で、棲めなくなったのであろうと推定されている。

このように遺跡から出土する昆虫遺体を調査・研究すると、今ではいなくなったり、珍しくなっている種類が多く見つかる。それはとりもなおさず人間の活動による自然破壊の結果であり、人間の生活の変化で、昆虫たちにも大きな影響を与えていることを実感するのである。

参考文献

大阪市立自然史博物館（1996）
昆虫の化石—虫の4億年と人類—
第23回特別展「昆虫の化石」解説書, 60pp.

鹿角市先人顕彰館

—内藤湖南の里を訪ねて—

石 立 弥 生 子

平成20（2008）年9月に、秋田県内の鹿角市先人顕彰館を訪問した。

東洋史学の泰斗といわれる内藤湖南（1866－1934）は、その晩年を約5万巻といわれる蔵書に囲まれ、京都の恭仁山荘で過ごしているが、鹿角市には内藤湖南の生家があり、湖南の功績をたたえる常設展示が先人顕彰館に設けられている。

関西大学には、創立100周年を記念して湖南の蔵書および遺愛品が寄贈された経緯があり、関西大学博物館では、それに関連して平成8年に「東洋史学の泰斗 内藤湖南」と題した企画展を開催した。また、この春に関西大学図書館でも特別企画展「内藤湖南—近代日本の知の巨匠—」が催され、不定期ではあるが湖南を顕彰する行事が行われている。かねてから湖南の生家を訪ね、先人顕彰館を見学したいと思っていたこともあり、青森県下の博物館・美術館見学もかね、思い切って十和田湖を経由して秋田県鹿角市までバスで遠征した。

内藤湖南の誕生地である鹿角市毛馬内は、秋田、津軽に境を接する要衝の地として、慶長12（1607）年に南部藩主利直公、直々の縄張りでもって城が築かれた城下町である。内藤湖南誕生地を示す石碑は、その武家屋敷通りに建立されている。その石碑の奥には、今でも内藤家ゆかりの方がお住まいという住居がある。

石碑から少し回りこんだところに、毛馬内領主（桜庭家）の筆頭家老の家に生まれ、十和田湖に鱒の養殖を成功させ、その生涯を十和田湖開発につくした和井内貞行（1858－1922）の生家があり、その跡が鹿角市先人顕彰館となっている。

青森からバスで南下したため、自然に囲まれた環境を十分堪能し、その印象が薄れないまま

毛馬内に到着。実は、バス停を降りて方向感覚を失くして困っているところを、庭木を剪定中の方に先人顕彰館まで送ってもらった。

大阪から来たことを告げ、次のバスの発車時間まで僅かしかないことを話すと、内藤湖南ゆかりの場所をわざわざ車で案内してくれた。

土地のかたの人情にふ

れ、感激もひとしおであった。

先人顕彰館では、受付を通るとまずは湖南の帰郷の折に、地域の人々と夜を徹して語り合ったといわれている書院（復元）が目に入る。

恭仁山荘でも、湖南を訪ね教示を請う者が列をなしたといわれている。秋田師範学校を卒業し、学者としては無名であったにもかかわらず、書や漢詩文にも優れた才能を発揮し、京都帝国大学で東洋史学の第一人者として多数の後進に影響を与えた湖南との会話は、いかようなものであったのだろうか。

この書院は『論語』の子罕編からとられたと思われる「何陋（かろう）」という額が掲げられている。鹿角から世界を見つめた湖南の矜持がうかがいしれるようである。

館内には、湖南の品格高い端正温雅な書や、遺品、書簡のほか、和井内貞行の関連資料など、鹿角市に縁の深い先人の資料が多数収集・展示されている。

【鹿角市先人顕彰館】 Tel：0186-35-5250

〒018-5334

秋田県鹿角市十和田毛馬内字柏崎3-2



鹿角市先人顕彰館（旧和井内邸）



台北縣立十三行博物館

山口 卓也

はじめに

台北市の西を南北に流れる淡水川は、台湾島の北端に近いところで東シナ海に注いでいる。いまでこそ北部の貿易港は基隆港であるが、もともと東シナ海の交易は、この淡水川をさかのぼって行われてきた。右岸の淡水の町には、1629年にスペインによりサン・ドミンゴ城が築かれている。



淡水川河口左岸に残る「十三行」という地名は、船客や貨物の船積みを行う船頭行とよばれる業者が13社あったことから名付けられたという説がある。現在この左岸河口周辺は砂堆と後背湿地がいりくみ、多様な自然環境を形成しているが、ここに発見された十三行遺跡の保存と活用のため、2002年に遺跡博物館が開館している。この十三行博物館を紹介しよう。



遺跡発見

1955年、戦闘機のコンパスが淡水川口左岸の八里郷十三行庄上空で乱れることから、中央研究院歴史語言研究所などが現地を調査したところ、多数の鉄屑と砂鉄鋳床が発見され、そこが台湾史前文化期の製鉄遺跡であることが判明した。

今までの発掘によって、多数の溶鉄炉と伸展葬や屈葬の墓、住居、土器や石器、鉄器や銀器



など多数の遺構・遺物が発見され、3世紀頃の製鉄技術を持った台湾島最古の遺跡で、15世紀頃まで存続したことが解明された。歴史的には、漢族の移住以前の台湾史前文化、鉄器時代に相当する。日本に対比すると弥生時代後期から鎌倉期に相当するだろうか。生業活動は、鉄器・石器や骨角器から、活発な狩猟・漁撈文化の存在が推定されている。いまのところ導入展示には十三行人の復原がやや原始的におこなわれており、農耕活動や社会構成についての言及は少ない。出土人骨から特徴を捉えて行われる十三行人の顔面と身体の復原は、一見の価値がある。



金や銀、ガラスや瑪瑙など当時の台湾で産しない装飾品は、交易により島外からもたらされた品物で、青銅製刀柄や漢～宋代の銅銭も発見されており、まさに台湾島と中国本土の文化的な交流と並行関係を意識できる。詳細な研究が進めば、琉球諸島や日本との交流も見いだされるかもしれない。

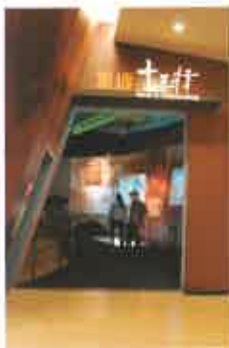
十三行遺跡の「十三行文化」は台湾島北部海岸部に広がったが、約500年前に消える。文化

的継承性や土器の紋様構成など考古学的データなどから、台湾島北部先住民、平埔族のケタガラン族との民族的関係が推定されている。

十三行博物館の開館

1989年に、この場所に污水处理場建設が計画され、遺跡保存を訴える考古学者と呼応する市民の反対運動が起こった。市民運動として残念ながら、発掘後遺跡のほとんどの部分が破壊されたが、約3000㎡が污水处理場建設計画を変更して保存されている。

1992年には博物館建設の決定がなされ、2003年に縣レベルで北台湾唯一の遺跡博物館、遺跡保存展示教育センターとして現在の十三行博物館が開館する。将来は八里左岸の環境を取り込んだ生態博物館群の中心館へと発展する計画があるという。



博物館は、「2002年度台湾建築賞第1位」を受賞した建物で、山をイメージしたコンクリート建物とクジラの背中のようなRC鋼製型枠建物を組み合わせた印象の深いレイアウトを持っており、一見して日本の有名建築家の博物館設計に似

ている。半地下の入り口を入り、階段を上ると発掘調査の再現があり、2階に二つの展示ホールを持っている。壁面に湾曲と傾斜があって意図的に四角い展示室にしていない点と、明るいミュージアム・ショップが印象的である。

今、十三行博物館は、隣接する八里污水处理場の巨大な球形沈殿槽施設に並立して、八里郷のランドマークとなっている。

台湾と考古学博物館

台湾出身の国民党李登輝総統が1988年に就任した後に污水处理場建設が計画され、2000年の民主党陳水扁総統就任後に十三行博物館が開館するという道筋は、台湾における市民意識、台湾人認識の高まり、経済至上主義から環境重視への舵取りと軌を一にしている。市民と研究者による遺跡保存運動の中で勝ち取られ、自然環境に一体となったコンセプトの博物館群に位置づけられたモダンな博物館は、今の台湾

社会のあり方とその地政学的位置を如実に表している。この数年、台湾島の考古遺跡の発掘が詳細に取り上げられ、さらに同じ2002年に国立台湾史前文化博物館が台東に開館したことなどは、漢族としての中国本土の歴史から台湾島の足元の歴史へと、台湾住民のアイデンティティ基盤が変化しつつある証しであろう。



十三行博物館は、中国文明圏の辺縁にある台湾島に千数百年にわたって存続した十三行文化を展示するものである。展示の中でこの文化は、台湾先住民である平埔族のケタガラン族との系譜が推定され、漢族とは異なる辺縁文化であることも強調されている。展示室に復原された服装や狩猟漁撈中心の生業と、発掘された高度な製鉄と活発な交易活動の存在から窺われる社会の姿とのギャップは、台湾史における漢族移住以前の先住民による部族社会という歴史観からであるか。中国辺縁文化圏での原始・古代からはじまる民族社会の成立、接触と移住、伝播と交易、定着・拡散のさまざまなモデルとして、日本の研究者にとっても興味深い遺跡と博物館となっている。



台北縣立十三行博物館

SHIH SANHANG MUSEUM OF ARCHAEOLOGY, TAIPEI COUNTY

台湾（中華民國）台北縣249
八里鄉博物館路200
200 BOWUGUAN RD.BALI
TAIPEI 249, TAIWAN
電話：886-2-2619-1313
E-mail：sshm@ms.tpc.gov.tw
<http://www.sshm.tpc.gov.tw>



台北駅よりMRT淡水線で淡水駅下車、フェリーで八里埠頭へ渡河。
バス（紅13番）乗車で十三行博物館。MRT淡水駅より約40分の行程。
月曜日休館 入館料：大人100元

長島侯と文人たち

—『独樂園賀詞帖』をめぐって—

中 尾 和 昇

はじめに

なにわ・大阪文化遺産学研究センターでは、『独樂園賀詞帖』(以下『賀詞帖』)と呼ばれる資料を所蔵している。これは、伊勢長島藩の五代藩主増山雪斎が藩邸内に築いた、「独樂園」に寄題する賀詞集である。当センターでは、この『賀詞帖』の図録を「なにわ・大阪文化遺産学叢書」として出版する予定である(2009年3月)。そこで本稿では、『賀詞帖』を紹介するとともに、いくつかの賀詞について若干の考察を加えたい。

長島侯と「独樂園」

増山雪斎は名を正賢といい、詩文・書画・煎茶などに堪能な、近世を代表する文人大名の一人である。大坂から十時梅屋を登用して藩儒に迎え、南画家の春木南湖を御抱絵師とするなど、長島藩の文化振興に多大なる影響を与えた。また、特筆すべきは、木村蒹葭堂との関係である。雪斎は大坂加番として在坂中、蒹葭堂としばしば対面し、その縁もあって蒹葭堂が過釀事件に巻き込まれた際には、彼を領内の屋敷地に庇護した。

「独樂園」とは、その名が示す通り、北宋の司馬光が洛陽での閑居時代に造園した独樂園をふまえている。十時梅屋の著述とされる『長島志』に「子城の北隅に独樂園有り」との記述が残されている(注1)が、現在その独樂園は桑名市立長島中学校となっており、往時を偲ぶことはできない。そこで庭園としての独樂園を探る上で手がかりとなるのが、この『賀詞帖』なのである。

『独樂園賀詞帖』

『賀詞帖』には、三十七名の賀詞が収められている。賀詞を寄せた人物は皆川淇園や片山北海など、京都や大坂で活躍した文人たちが中心で、雪斎を軸とした文人交流を窺い知ることができる。また、これらの賀詞には「長島侯命」

や「長島侯需」といった言葉が記されていることから、雪斎の依頼によって賀詞が詠まれたようである。

それぞれの賀詞には絹地が用いられており、それらが折帖に仕立てられている。しかし、そのような仕様になったのはごく最近のことである。市河三陽が著した『市河寛斎先生』(曾祖父である市河寛斎の事跡を年譜風にまとめたもの)には(注2)、

その真蹟三十六葉を寓目してその詩を抄し置けり。統絹に書しその大さ普通詩箋の如し。と記されている。ここで注目すべき点が二つある。ひとつは賀詞の数である。一々挙げることはしないが、三陽が披見した賀詞には現在の『賀詞帖』に収録されている岩垣竜溪の名がない。つまり、一葉分の賀詞が後に加えられたと考えられる。二つめとしては「葉」「詩箋」の文字が示すように、一枚ずつが単体で存在していたということである。

これらのことから考えると、三十七名分の賀詞が折帖に仕立てられたのは三陽が没する昭和二年以降と考えるのが穏当であろう。

賀詞を揮毫した文人たち

つぎに、『賀詞帖』に収められたいくつかの賀詞について考えてみる。なお、賀詞の選択については、稿者の恣意によることをお断りしておく。

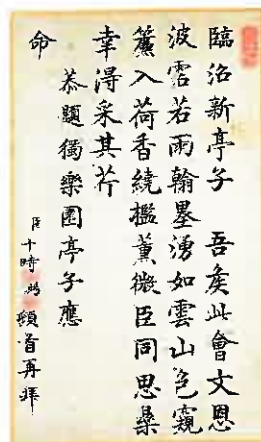
①十時梅屋

臨沼新亭子 吾侯此会文 恩
波霏若雨 翰墨湧如雲 山色窺
簾入 荷香繞檻薫 微臣同思樂
幸得采其芹
恭題独樂園亭子応
命 臣十時賜頓首再拜

十時梅屋は大坂の人。経義に明るく、書画も能くした。書の師である趙陶斎とともに、来坂

中の雪斎に招かれた際、ともに出入りしたことがきっかけで、天明三年（1783）ごろ伊勢長島藩儒に登用された。さらに、同五年（1785）には再建された藩校「文礼館」の祭酒を任されるほど、雪斎との関係は親密なものとなった。

さて、梅厓の賀詞には雪斎の恩恵に対する心情が吐露されている。



十時梅厓 賀詞

②木村兼葭堂

奉寄題

長島賢侯独樂園

名園新結構 山水愜清心 自

有高人樂 寧須迂叟吟 窓

南多竹樹 亭北宿文禽 想

像端居暇 優遊書与琴

癸卯夏五

木孔恭頓首拜

木村兼葭堂は、大坂北堀江五丁目の造り酒屋坪井屋に生まれた。本草学を津島如蘭・小野蘭山に、画を大岡春卜・柳沢淇園・鶴亭・池大雅に、篆刻を高芙蓉に、詩文を片山北海に学ぶ。また、書籍や標本類の収集家としても知られ、好事の文人として幅広い交遊をもった。

雪斎との関係は、彼の在坂中から始まったとされているが、先に述べたように、寛政二年（1790）の過釀事件において長島藩領内の川尻村に身を寄せたことが、両者の親交を象徴していると思われる。

兼葭堂は賀詞において、独樂園における閑雅を述べている。「窓南多竹樹」「亭北宿文禽」とあるように、亭を囲むようにして竹が生い茂り、山鳥の鳴き声があたりに響き渡る。そして、そのようななかに雪斎は「書」や「琴」に「優遊」するわけである。ただ、注意したいのは、これ

が兼葭堂の「想像」だということである。「癸卯」とあることから、賀詞が成立したのは天明三年ごろと考えられる。この時点では、兼葭堂は大坂に住んでおり、長島を訪れてはいない。雪斎から独樂園のことを聞いていたとも考えられるが、先に少しふれた司馬光の独樂園が、揮毫の経緯をさぐる大きな手がかりとなる。

司馬光は独樂園に関して「独樂園記」という文章を記している。これは『古文真宝後集』に抜粋のかたちで収録されており、きわめて著名な文章である。兼葭堂ほどの文人ならば周知のはずであろう。そこで、「独樂園記」と比較してみると（注3）、

●兼葭堂賀詞

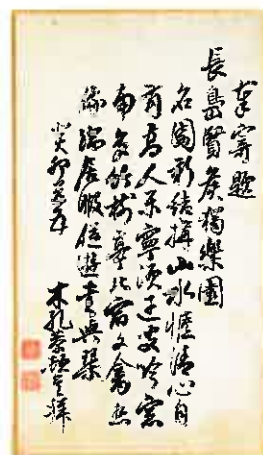
…寧須迂叟吟…

●「独樂園記」

迂叟平日讀書…

とあるように、「迂叟」という司馬光の号が引用されている。雪斎を司馬光になぞらえた表現として興味深い。

本稿では紙幅の都合上、これ以上の考察を加えないが、他の賀詞についても同じ例が確認できる。



木村兼葭堂 賀詞

おわりに

「独樂園」と聞くと、自分一人が独占して楽しむという印象を受けるが、そうではない。極めて謙遜した、自分だけに許された楽しみを意味しているのである。独樂園は、後樂園や偕樂園のように、主君と人民が和樂することを目的とした庭園ではないが、賀詞を依頼された三十七名という限られた人びとにとって、雪斎との交流は、この上ない「楽」しみだっただろう。

(注)

1. 『長島町誌』上巻、145頁
(長島町教育委員会、1978年4月)
2. 『復刻 市河寛斎先生』80頁
(あかぎ出版、1992年2月)
3. 『古文真宝後集』（宝暦五年版、架蔵本）

ジャマヒリーヤ博物館

—リビアの首都トリポリを訪れて—

青木真兵

2008年11月上旬、私はリビアを訪れた。リビアは北アフリカに位置し、地中海に面する。東の国境をエジプトとスーダン、西の国境をチュニジアとアルジェリアに接している国である。1人では入国に手間がかかるという理由で、西遊旅行社の企画するツアーに参加することになった。ドバイを経由してリビアの首都トリポリに到着するまで、約20時間の旅である。

今回訪れたジャマヒリーヤ博物館はリビアの首都トリポリの中心に位置する。博物館へ入ると、エントランスには後4世紀に造られた巨大な墳墓や、後1世紀もしくは2世紀に作られた大理石のヴィーナス像、そしてカダフィ大佐が革命の直前に使用したフォルクス・ワーゲンまでもがホールを取り囲むようにして配置され、私たちを出迎えてくれる。博物館自体は地上階、1階、2階、3階という4つの階層から構成されており、まず地上階では、旧・新石器時代の数多くの石器やサハラ砂漠に点在する洞窟壁画の複写を見ることができる。壁画には人びとが槍や弓を用いて巨大な牛を獲ようとしている様子が描かれており、遠い原始社会に生きる人びとの必死の営みが甦ってくるようだ。私たちは壁画に描かれているサイや牛などの動物を、今ではサハラにおいて決して見ることはできない。古代においてサハラは、緑豊かな土地だったことがわかる。

次は古代地中海世界に関する展示である。古代ギリシア・ローマ時代、リビアの沿岸部は西と東に区別されていた。西部地域はフェニキア人によって建設された都市が3つあったことから三都市「トリポリス」と呼ばれ、この地域は「トリポリタニア」という名称で形成されていく。首都トリポリの語源である。また東部はギリシア人の都市が5つあったことにより五都市「ペンタポリス」と呼ばれた。

フェニキア人に関する展示も若干であるが見ることができる。その中には砂岩で作られたフェニキア人の彫像が含まれていた。フェニキ

ア人に関する展示スペースを通り過ぎると、ギリシア人にまつわる品々が並ぶ部屋へと続く。アテネやミネルヴァ、ディオニュソスなどの古代の神々を表す大理石の彫像と共に、特徴的なギリシアの黒色土器やランプ、燭台に至る日々の生活用品も展示されている。

そして次は胸像や彫像、モザイクが所狭しと立ち並ぶローマ時代へと足を踏み入れることとなる。ローマ帝国の支配の下で、トリポリタニア地域は都市レプティス・マグナを中心に大きな発展を遂げた。この場所に展示されている彫像は、レプティス・マグナから持って来られたものが多く、前のギリシア・ゾーンで見たような神々の姿ではなく、神々と同一視された皇帝の姿を表している。それら全ては十分な威圧感を、そして当時の人びとが抱いたであろう畏怖の念までも現代に伝えている。一方、展示されているモザイクは大理石製の白一色の彫像とは打って変わって色鮮やかである。そこには四季の様子や食べ物、海で働く人びとや数多くの魚と戯れる神々の様子が描かれている。



階段を上ると1階である。そこにはローマ時代のコインやランプなどの小さな遺物が、薄暗い照明の中で浮かび上がるように幻想的な展示がなされている。壁際に並ぶ胸像も現在に蘇ってくるかのようなリアリティを持っている。地上階と1階は吹き抜けになっており、地上階では見上げていた大理石の彫像群を俯瞰することができる。

2階はイスラームの都市的文化と遊牧民の生活形態が中心に展示されている。都市的文化の品々として、緑と黄色で彩られた幾何学文様がデザインされた器や、金属で作られた水差しなどがある。遊牧民の生活を表すには民族衣装を着た人形が用いられ、彼らの住空間が再現されている。私はこの展示からリビアには幾つもの民族が存在していることを知り、リビアを「イスラームの国」として画一的に概括することは決してできないことを学んだ。



3階は主に帝国主義との戦いの時代とリビアの自然史に主題がおかれている。前者に関しては、イタリアに対する解放運動を行い1931年に処刑されたオマル・ムフタルや、1969年に無血革命を達成した現リビアの指導者カダフィ大佐の写真やその記録が飾られている。また自然史に関する展示はリビアの自然環境がいかに過酷であるかについて物語っている。リビアの国土は日本の約4.6倍にも関わらず、人口は600万人と日本に比べ圧倒的に少ない。それは人びとが生活できる環境が沿岸部に限られているからであり、それ以外は砂漠が広がっているためである。

以上のように、この博物館ではリビアという国がいかに多種多様な人びとの流入とその興亡の末に出来上がっているのかということを知ることができた。サハラが緑に溢れていた頃からこの地に住む土着の人びと、交易の民として地

中海を横断したフェニキア人、現在まで残る美の形式を作り上げたギリシア人、それら全てをまとめ上げて帝国を築いたローマ人。ローマ帝国滅亡後、イスラーム文化圏を構成して現在に至るアラブ人。リビアの「歴史」はこれらの人びとの営みの上に形成されている。

実際に、現在博物館の建っている場所はもと古代ローマ時代に公共浴場として使用され、それがイスラームの時代には要塞として改築されたのであった。それから現在に至るまで権力者はこの建物を利用し続けてきた。ヨーロッパにおいてローマ人が造った町であるということは、「伝統的な町」であるということを意味し、町の人びとはその事実を誇る。ローマン・カトリック、神聖ローマ帝国、果てはナチスの第三帝国まで「ローマ」とのつながりなくしてはヨーロッパを語ることはできない。しかし北アフリカは事情が異なる。ローマ帝国滅亡後、ゲルマン民族の侵入を経てイスラーム勢力が居を構えた際、ローマ人が造った都市はことごとく破棄された。北アフリカにおいて、都市トリポリやこの博物館のように人が古代より継続して「同じ場所」を利用し続けている例は少ない。その理由として、ヨーロッパのアイデンティティともなっていくローマ帝国とイスラーム勢力の間には大きな「断絶」が存在するから、と私は考えている。この観点から見るとトリポリはその「断絶」を架橋している。そしてそれはこの地が持つ多種性に求められるのかもしれない。旅行者はこの博物館において、その多種性に実感として触れることができるのである。



◆ 博物館だより

◇平成20年度関西大学博物館 開館日数・入館者数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
開館日数	27	26	21	23	4	8	24	18	16	16	15	21	219
入館者数	2,523	1,934	645	639	1,394	201	414	1,135	158	171	42	280	9,536

◇平成19年度から北大阪にある48館・園の美術館・博物館・動物園などでネットワークを組み、さまざまな事業を行っています。平成20年度も文化庁からの委託をうけ、北大阪ミュージアム・ネットワークとして講演会・見学会や展示会を実施しました。経済の衰退や社会の流動化が急激にすすむ難しい時代ですが、それぞれの博物館・園の連携を活性化し、地域文化資源の整備・活用に積極的に取り組み、その成果を地域に発信していくための場所として、これからも北大阪ミュージアム・ネットワークの活動に参加していきたいと思っています。

◇11月17日（月）から22日（土）まで、関西大学博物館展示会「北摂の文化遺産」を本館第2展示室で開催しました。本展示会は、文化庁から委託をうけた北大阪ミュージアム・ネットワークの取り組みの一環として、従来の博物館実習展を拡大し実施したもので、実習生たちは「モノレール」「日世」「ガンバ大阪」「菊炭」「池田のがんがら火祭り」など、北摂地区にゆかりの深いテーマの5班に分かれて、地域の皆さんの協力を得ながら企画展示を行いました。762人の方がたにご覧いただきました。

◇博物館ホームページをリニューアルしました。博物館のイベント情報や資料紹介など充実したコンテンツでお届けいたします。<http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/index.html>

◇4月1日（水）から5月17日（日）まで、「浪速の絵師 菅 楯彦の画業～職業婦人繪巻～」を開催します。本企画展は昨秋TV放映された「出張！ なんでも鑑定団 in 関西大学」で高い評価を得た菅 楯彦画伯の『職業婦人繪巻』を、上田登志恵様と橋本知恵様からご寄贈いただき特別に展示するものです。「繪巻」は全長14メートルの大作で、電話交換手や美容師、看護婦のほか農作業や機織の風景など、市井に生きる女性たちの姿が表わされています。また、関西大学図書館所蔵の菅 楯彦作品なども展示し、大坂画壇の重鎮であり浪速の風俗をこよなく愛した画伯の作品の数々を紹介します。

・ ・ ・ 編集後記 ・ ・ ・

『肝陵』第58号をお届けいたします。今号は米田先生と黒田先生、宮武先生から玉稿をいただきました。さらに、本学文学研究科 青木氏、なにわ大阪文化遺産学研究センター研究員の中尾氏からの報告を掲載しております。ご執筆賜りました皆様に感謝申し上げます。また、本館学芸員の山口と石立から博物館見学調査についての報告をさせていただきました。

平成20年度は、上田登志恵様と橋本知恵様から菅 楯彦作「職業婦人繪巻」一巻と、羽間平安元理事長（現顧問）から千成瓢箪3竿23瓢、大門 博様から九頭神麿寺出土単弁蓮華文軒丸瓦一片をご寄贈いただきました。また、植田兼司様から石器図1巻と牽牛子塚古墳出土の夾紵棺破片6点を研究利用のため貸与いただきました。今後、博物館で充分活用していきたいと考えています。

表紙は、羽間顧問から、学校法人の理事改選ならびに新理事会の役員就任を記念して寄贈いただいた千成瓢箪のうちの1瓢です。千成瓢箪は秀吉の馬印で有名ですが、もともと関西大学には大学の象徴として千成瓢箪が伝わっており、慶事の際に酒器として利用されていたようです。戦中期に解体されたといわれ、現在ではその行方が不明でしたが、今回ご寄贈いただいたことにより、失われた関西大学のシンボルを取り戻すことができました。本館第2展示室に展示していますのでご覧ください。



九頭神麿寺出土
単弁蓮華文軒丸瓦